

PARANOIA!



数時間後。

「……兎の家ってこれでいいのか？」

まるででんじ●う博士が作った空気砲のような物体を見て、ため息をつく。

先ほどの兎は念入りに治療をしておいたが、それでも小さな体につけられた深い傷はなかなか癒える様子を見せなかった。

今も、辛そうにハンカチの上で横たわっている。

「あーあ、ハンカチ血だらけだよ……。それにしても何なんだ、この傷」

兎の体に無数にあるそれは、とても不可解なものだった。

捨てられる際に虐待でも受けたのだろうか？ それとも鴉か何かによられたか？

普通兎が怪我をしていたらそう思うだろう。

でも、それにしても綺麗に抉られてすぎている。

抉られているというより、斬られているのほうが正しい気さえしてくる怪我だ。

冷たい風が凌の頬を撫でる。

「寒いのは苦手か？」

そう言って軽く兎に触れると、案の定ひんやりとしていた。

そういえば猫かってる時、冷房嫌がってたもんな。

リモコンを手にとり、後ろを向く。

それは僅かな間。ほんの数秒。

冷房を消し終え、振り向いた俺は思わず小さな悲鳴をあげた。

「……何だこれは？」

血で汚れたハンカチの上に兎の姿はない。

代わりにいたのは、満身創痍、傷だらけの少女だった。

へ、変身した……？ 新種の生物？ キメラか？ いやいやゲームじゃあるまいし…… 夢か？

そうだ、ネットゲームのやりすぎかもしれない……ってそんな訳ないか。

「落ち着け俺……落ち着け……」

混乱する自分を必死に宥めていると、苦しそうな呻き声が聞こえた。

「……混乱している場合じゃないな」

取り敢えず何かしてやらないと、このままじゃ少女は死んでしまうかもしれない。それこそ、一大事だ。

「なんか……悪夢を見てるみたいだな。 起こした方が良いのか……？」

恐る恐る椅子から立ち上がる。

「おーい。 兎さんやい」

……起きない。

仕方ない、揺すってみようか。

苦しむ少女の肩に手を置く。

激痛が走った。

「……え？」

目の前には短剣を握る少女。そして、目を見開いた顔は敵意と恐怖に染まっている。少女の赤い服よりももっと赤黒い血液が、俺の服を真っ赤に染めていた。

床に膝をつく。

恐怖で自分の四肢が強張るのが分かった。

まるで何度も突き刺されているかのように、彼女に斬られた肩が痛む。

俺、殺されるのか。

俺の人生、これで終わっちゃうのか。俺、ここまでなのか。見ず知らずの少女に殺される、小さい奴だったのか。

強く目を瞑る。何も見たくなかった。自分の血液や内臓なんて、特に。

……死にたくねえなあ……

だが俺の体は、切り裂かれも、貫かれもしなかった。

「……？」

躊躇いつつもそっと目を開ける。

少女は、ただ立ち尽くしていた。

見えるのは、恐怖から安堵へ変わっていく表情。そして役目を終えることなくゆっくりと下ろされる短剣。

小さく開いた口から、か細い声が耳に入った。

「……ひと……？」

俺の記憶は一旦ここで途切れている。

最後に見たのは、少女の手から鈍く光る短剣が落ちていく様子だった。

目が覚めると、俺の部屋の天井が見えた。

慌てて上半身を上げようとしたら、肩に鈍い痛みを感じた。

「あ、まだ動かない方がよいよ。一応ヒールしておいたけど、危ないから」

.....何やら聞き慣れない声が。

声の聞こえた方に目をやると、まさに今さっき斬りつけてきた張本人がいた。

「ごめんね、まさか親と会えるなんて.....っていうか何故この世界に来たのか、私もわからないのよ」

は？ 親？ つかなんでここに？ ていうか俺気絶してたのかよ、格好悪い。

色々と混乱する頭の中と恥ずかしさで思わず布団の中へ潜り込む。

その時、フッとある映像が凌の脳裏をよぎった。

少女をどこかで見た。そんな気がする。

まさか.....

急いで布団から顔を出し、少女に目をやる。

.....確信した。間違いない。

「お前.....ティアか？」

少女は嬉しそうに笑い、ゆっくりと俺の隣へと移動してきた。

「おお、気付いた！」

そいつは—.....ティアは、

俺がラテールというゲームで最初につくりだしたアバターだった。

全体的に紅くてリボンが特徴的な紅ゴシックローズドレス、兎耳のはえたシルクハット。
左右に分けて結われているラズベリーの色をした髪。

間違いなく俺のつくったアバター.....その名も、「ティア」だ。

ティアは俺の手を握ると、嬉しそうに、悲しそうに、そっと呟いた。

「ひさしぶり、凌」

「……だけど何故ラテールからこっちに来た？ しかもいきなり斬りつけて来るとはどういう了見だ」

ティアは俺のアバターであるというのは……まあ、仮だが一応信じよう。だがいくらなんでも初対面の人に刃物で挨拶とは何事だ。

ティアは困った様な不思議な様な顔をして俺を見上げた。深い紫色の瞳がこちらを見て、不安定に揺れる。

「……斬りつけたのはごめんなさい。でも、いろいろと事情があったの。これから話すから怒らないで。だけど……何故こっちに来てしまったかは私にも分からない。いつも通り私はモンスター達と戦っていたはずだった」

「だったらどうして？」

僅かな躊躇いを匂わせつつ、ティアが息を吸い込む。

「死にかけたの、私」

死ぬ。ネットゲームでは、HPが完全に無くなった状態を表す言葉だ。

「そうか……いやでも、そしたらイリスの碑石か石塔に飛ぶだろ？ ペナルティで経験値とELYが引かれるけど、異世界に飛ぶなんてハチャメチャなことおきるのかよ」

「違う。あの『死亡』は本当の死亡じゃない。普段はぎりぎりのところでイリスの力が私達を守って、助けてくれるの。 だけど……あの時は、その感覚が無かった。本当に、私死ぬんだったと思った」

「だから目覚めてからいきなり斬りつけてきた訳か」

「必死だったから……何も考えてなかった。……ごめんなさい」

素直に謝るティア。それを見た俺は……なんだか、怒りが萎えてしまった。ちょっぴり大人げなかったかもしれない。

「ま、まあ……気にしなくていい。だけど、本当にティアがこっちに来たとしたら、ラテールの

世界とこっちの世界が今繋がってると考えても良い……んだよな？ だとしたら戻れないのか？」

ティアの眉が困った様に八の字をつくる。
どっかの顔文字みたいだ。(´・ω・`)

「さあ……。 私、気付いたらここに居たから。」

……駄目だ、詰んだ。(´・ω・`)

一生この子と暮らす事になったらどうするんだろうか。……家族には、なんて話そう。
姉ちゃんや……母さんは特に、彼女～?????とかってしつこく聞いてきたりするんだろうな……。

「あ！」

「うわっ違うって！！ か、か、彼女なんて俺には……っ」

「え？ 彼女？」

「い、いやなんでもない。どうした？」

「普段この世界からラテールに繋げる場所ってどこ？」

「？ PCだけど……」

「今直ぐ立ち上げて！」

「え、待て、なんでだ？」

「いいから早く！ そこから戻れるかもしれないでしょ！」

「な、なるほど」

急いでPCの電源スイッチを入れる。

「一応、ラテールのHPにいてみよう。もしかしたらだけど、詳しく書いてあるかもしれない」

「わかった」

お気に入りフォルダから「ラテール公式サイト」という文字をクリックする。
ページが飛んだその先には、いつも通り可愛いイラストや文字がある……はずだった。

だけど、何もなかった。
ただ、真っ白なページが続いていた。

「何もない……」

「ううん、何か書いてある」

ティアが指をさした場所には、無機質な黒い文字で「help」とあった。

「……なんだこれ？」

「私が押す」

ぐいっとティアの手が俺の腕を押しつける。

「ちょっと待てよおい、安全かも分からないのに」

「これしかない！！」

力強い声が凌を押さえ込む。
豹変したティアの様子に息を飲みながら、落ち着かせるようにゆっくりと声をかけた。

「……なんで、そんな事分かるんだ？」

「感じる。これしかないの。『ラテール』が助けてっていつてる。きっと……いえ絶対に、私が
いかないと駄目」

強い口調。駄目だ、絶対こいつ意見変えねえな。
思い通りにならない現実が少し歯がゆい。

けれど、凌の中にわき上がる感情は呆れでも不安でもなかった。

ただ、わくわくしている。

興奮しているのだろう、自身の頬にうっすらと笑みが浮かぶのが分かる。

面白い、乗ってみるか。

「分かった……押せ」

ティアが息を飲む。一瞬こっちを見た後、そっと呟いた。

「ありがとう」

……まったく、俺もお人好しだよな。

カッというクリック音が聞こえる。

意識が飛んだ。

どれくらい気を失っていたのだろうか。

朦朧とする意識の奥深くを漂っていると、遠くから何かが聞こえてきた。

——……う、

りよ——

あ、呼ばれてる。

いかなきゃ。俺、呼ばれてる。

動こうと体に力をいれたとき、それは今聞こえた声と全く別物の声で、ハッキリと聞こえてきた。

「信じてたのに。」

瞼が開く。眩い光が、突き刺さるかのように目に飛び込んできた。

そしてそこには、見覚えのある少女が。

「凌！！ 凌、良かった……しんじゃったかと思ったよ……」

……あれ、こいつだれだっけ？

ああ、俺の……アバター。

確かラテールに…… ? え、ここ俺の部屋じゃないよな？

がばっと起き上がり慌てて周囲を見渡す。

さっきまで自分の部屋だったはずのそこは、豊かな自然と暖かい太陽の光に包まれた山林地帯だった。

どうしてこんな所に……

……ああそうだ俺、確かPCから……

「凌……せっかく感動の再会なんだからもうちょっと何か喋ってよ」

……あ、忘れてた。

「忘れてたって顔してるね……。まあいいや、とりあえずここは敵もいるし危ないから、ベロスに移動しよう」

「おお、分かった」

すぐさま移動するティアを慌てて追いかけて、二人でベロスへと足を運んだ。

はじまりの町、ベロス。

そこは、人気の多く、活気に満ちた賑やか且つ落ち着いた町……

のはず、だった。

「だ……誰もいない……」

まるでパステル色の童話の世界、といわれているようにラテールはとても鮮やかで美しい世界だった。

そう、いつも通りのベロスなのだ。

なのに、誰もいない。

ベロスには、アバターは勿論、NPCと呼ばれる冒険を手助けするラテール独自のキャラクター達さえも丸ごといなくなっていた。

「とりあえずどこか建物に入ろう？ もしかしたら、みんな寝てるとか！」

「いや寝てるはないだろうけど……。まあ探さないと俺らこれから何していいか分かんねえしな。俺はレストラン探すから、お前武器店頼む」

「えっ」

「え？」

ここは普通に頷かれるかと思ってたんだが……。

ティアの顔を見やると、眉が不安そうに八の字になっていた。

「……一人で探すの……？」

駄目だこいつ。

「すいませーん！誰かいませんかー！！」

凌達がいるのはベロスのレストラン。

誰かを見つけて事情を聞くべく、思い切り叫んでみても、何の音も聞こえずただ二人の声は響いていただけだった。

「おっかしいな……。何で誰もいないんだ……？」

「ん～……私二階みてるね」

ティアは勝手にそう言って梯子をのぼり、すたすたと二階へ向かう。

その瞬間。

ゴトッ

小さいけれど、何かの物音が聞こえた。

「凌……この扉の向こうから……聞こえたよ……！」

「んなもん自分で開けろよ！」

「やだよっいきなり敵とか悪人とかでてきたら大変じゃないか！」

んなことってお化けとかが怖いだけだろうが。

ふう、とため息をつき梯子を登って二階へと足を運ぶ。

まずは奥にある、ティアの前の扉を軽くノック。

コンコンッ

……

……反応がない。

仕方ない、この怪しい扉を開けるか。

けどお化けはでないとしても、ティアの言い訳通り扉を開けた瞬間何者かに攻撃されては困る。

確か、ティアはヒールがつかえたな。後ろで待機しててもらおう……。

「ティア、下がってろ」

「了解」

うん、実に素直な返事だ。

半分呆れながらも、ドアノブに力を入れ、突き飛ばすように扉を開けた。

その瞬間、凌の頬に何かが擦る。

それは凌の背後の壁に突き刺さり、ゴスツという嫌な音をたてた。

「!？」

慌てて振り返ると、なんとそこには一本の矢。

そして怒鳴り声。

「誰だお前ら！！ 出て行け！」

出会い頭に怒鳴られるとは……。最近こんなんばっかだな俺。

自分の不幸を嘆きながら声のした方を見た凌は、そこにあるものに自分の眼を疑った。

何故だかそこには、本来ベロスに居る筈のNPC達全員が、いたのだった。

「ま、待って下さい！ 俺ら怪しい者じゃ……」

慌てて誤解をとこうと声をあげた瞬間、更に大きな声が後ろから飛んできた。

「アンネさああああああああああん！！！！！！！！」

「！？」

アンネと呼ばれた……いや叫ばれた女性は、ティアの存在に気付いたようでパァッと顔を輝かせた。

「ティアちゃん！ 久しぶりじゃない、無事だったのね……よかった！」

「わああアンネさん久しぶりだー！ 無事だったって何が？ わああアンネさーん！」

「おい、今大事な質問飛ばしたぞ。無事だったのねって、どういう事だ？」

アンネの視線がこっちに向けられる。

疑問符を頭に浮かべた様に、アンネは首をかしげた。

「？ こっちの男の子は？」

「私の親の凌です！」

「え、親？ って、あっちの世界の？」

「そう！ こっちにきちゃいました！」

すると奥の方から、大柄な身体つきをした男……バルトがぬっと顔を出してきた。

「なんだエステル、知り合いか？ 俺たちにも紹介してくれよ」

お互いに挨拶と軽い自己紹介をする。

ここにいるのは、物品保管庫を管理しているアンネ、道具屋のエステル、戦闘用具店のケベルとバルト、長い間ベロスに住んでいるロハンの5人だった。

そして水色の髪をした少年も続く。

「僕はイヴ。ティアさんだっけ？ 君と同じアバターだよ。宜しく」

「！ そうなんですか！ 宜しくお願いしますー」

「皆さん、宜しくお願いします」

一通り挨拶も終わったので、凌がこちらに来た過程をなるべく詳しく話す。

話終わった後、聞いていた6人ははぁーと惚けた顔でため息をついた。

「すごいな、そんな事って本当にあるのか。……すげえ」

「俺も未だに実感ないです。なんていうか、夢みてるみたいだ。俺が今話せる事は、これで全部です」

「そうね……話も聞かせてもらったし、今度は私達が話す番かしら」

話を聞いている間ずっと黙っていたエステルが声を発する。

「単刀直入に言うとね、ラテールの内乱みたいなものよ」

「内乱？」

「そっちの世界に居る親達から作られたアバターが、反乱を起こしたの」

「……え？」

時が一瞬止まったような気がした。

「内乱って……どういう事ですか？」

「ラテールができてから4年。いくつものアバターが消されてきたわ。信頼していた親を失い、記憶も設定も何もかも全て消され、そしてまた新たな親の元へと送り出される。」

背後でティアがビクリと震えるのが分かった。

「……記憶が消されるんですよね？ なら何故反乱を？」

「一人だけ、記憶を消されずに残ったアバターがいるのよ」

「……！ まさか……」

「その一人のアバターを起点として、多くのアバター達がどこかに捕らえられてしまったの」

「ああ、だから皆でここに隠れていたんですね」

「そうなの。いきなり攻撃されて驚いたわよね、本当にごめんなさい」

ゴクリ、と息を飲む。

自分の心臓が脈打つ音が聞こえて来る。

張りつめた空気の中、ゆっくりと言葉を紡ぐ。それが精一杯だった。

「いえ、もう気にしてないです。それより、何か……解決策は無いんですか？」

「1つだけ、ある」

イヴと名乗った少年が前にでてくる。

「起点となったアバターはあるアイテムを使い、捕らえられたアバター達の行動を操ってる。そのアイテムが壊れたり、リセットされたりすれば……みんなは解放されるはず」

そうイヴが言うと、ずっと黙っていたロハンが口を開いた。

「凌くん、頼む。君が……この世界、ラテールを救ってくれないか」

「え？ 俺が？」

「アバター達は……怖いんだよ、消されるのが。きっと『親』を信じられなくなってる。……君が、教えてあげてくれ」

一息置いて、ロハンは続ける。

「親とアバターの『絆』ってやつを、さ」

親。

参ったな俺、18歳で親になっちまった。

「つまり、その起点のアバターを見つけてそいつの持ってるアバターをぶっ壊せと？」

イヴの瞳が陰しくなる。

「まあ、そういう事。……でも甘く見ない方がいい」

「？ 時間はたっぷりあるんでしょう？」

少しの間が空く。

イヴは何かを考えているように、ゆっくりと俺に話しかけた。

「……。なあ、凌 その指輪。いつ、つけた？」

「指輪？」

俺は指輪なんてつけていなかったはずだ。

両手を開いて確認する。

開いた左手の中指には、銀色に輝くシンプルな指輪がはめられていた。

「……！？ 何だこれ……俺、指輪なんてしてないのに」

「時間制限だ」

「時間制限？」

「その指輪が消えてなくなるまでに、全てを解決しなくちゃならない。でなきゃお前は……元の世界へと強制送還される」

……やっぱり楽にはいかないか。

もう一度、唾を飲み込む。

「それまでに、全てを終わらせなきゃいけないわけか。……キツいな」

「まあ、簡単にはいかないってことだ。……お前にしか、出来ない」

俺にしか出来ない。

つまり、俺がやらなきゃいけないのか。

すこし間をおき、そっとつぶやく。

「.....そうだな、まずはエリアスに行こうか」

「引き受けてくれるのか？」

イヴ達に背を向け、出口へと向かって歩き出す。

凌、と心配そうなティアの声が聞こえる。

「凌、何しにいくの？ 引き受けないの？」

不安そうなその質問に、ばーか と笑って応える。

「説教すんだよ」

「説教？」

「そう。只今絶賛反抗期の奴に、一発かましてやんねーとな」

それは凌とティアの冒険の幕が、今まさにあがった瞬間だった。

ラテールの都市、エリアス。

初めて来る場所に興味津々でいると、案内してくれていたアンネが急に立ち止まった。

「えっとまずね、お礼も含めて凌君とティアちゃんの冒険のための準備をしようと思うの」

「！？ え、そんな申し訳ないですよ！」

「気にしないで。だって、貴方達がいなきゃ私達はずっとあのまま隠れていなきゃならなかったのよ。さすがに冒険をずっと共にする事は出来ないけど、せめて後押しくらいはさせて欲しいの」

「アンネさん……」

確かに、まだまだ未熟の俺とティアはこれからの冒険をうまくやっていけるか分からない。むしろモンスター達にやられたり、タイムリミットで元の世界に強制送還されてしまう可能性の方が高いだろう。

「分かりました。……有り難うございます」

「とりあえず装備は防具・武器職人の俺たちに任せてくれ。薬は道具屋のエステルがいるし、ファッションはアンネに任せよう。」

と、ケベルが提案する。それにまたアンネが乗った。

「じゃあまず私とファッションを選びましょう。ケベルとバルトにエステルは用意するのに時間がかかるだろうから」

「はい、宜しくお願いします」

まじめな会話の途中に、のほほんとしたティアの声が割り込んでくる。

「じゃあ私ここで待ってるよー」

「ん。知らない人についてっちゃ駄目だぞティア」

「うるさいよ！」

凌はハハッと笑い、ティアを背に走り出した。

「ではここに入って、自動的に今着ている服と似た様な服を機械さんに選んでもらいませう」
「はあ」

アネスの指差した先には、町にあるポータルのような物で淡い桃色の光を放っている。

「中に入って。気付いたら着替え終わってるはずよ。」

怪しいものにも見えるが、彼女が言うなら大丈夫なんだろう。
恐る恐る中に入ると、ふわっと身体が宙に浮く。
とろとろと眠りにつく、そんな感じだった。

♪

「ティアさん」

名前を呼ばれ振り向く。
そこにはサンドウィッチを二つ持ったイヴの姿があった。

「これ差し入れ。良かったら食べて」
「おおお、美味しそう！ これイヴ君が作ったの？」
「うん、僕錬金術師なんだ」
「へえ～すごい……。凌は錬金術なんてやらせてくれなかったよ」

いただきます、と呟きそっと口に含む。
クスリとイヴが微笑んだ。

「錬金術の存在を知らなかったのかもね。僕の親も最初は気付かなかったみたいで、一次転職を終えてやっと気付いたんだ」
「ありゃりゃ……。って、え？ イヴ君にも親っていたの？」
「そりゃあ一応僕もアバターだもんさ、親はいるよ。今何してるのかなあ、あの人。」

イヴの瞳が軽く曇る。
あ、この人……。痛がってる。

「最近会ってないの？」

「飽きちゃったみたいで最近全くこないよ。二次転職終えてエレメンタルマスターになっちゃったから、仕方ないけどさ」

「あ、飽きる……？」

それはティアにとって衝撃的な言葉だった。

飽きる。

親が、飽きる。

つまり、アバターが親に 捨てられる？

……私が凌に 捨てられる？

「たまには会いたいな。まああの人にとってはもうラテールの目標は無くなっちゃったし、やってもつまらないかもしれないけど。……元気かな」

凌に、捨てられる……。

身体が強張る。考えられない事だった。あんなに親しく会話もしてくれて、別世界の時だけと一緒に冒険もして、それなりの絆は出来ていた……はずだ。

……私だけなのだろうか。

絆を感じていたのは、

私だけだったのだろうか。

「所詮ゲームだし、あの人にとって本当に大事なものは現実世界。仕方ないよ、アバターの運命ってやつかな」

イヴの瞳が更に暗くなる。

それに気付いた途端ハッと我に返り、じっと瞳を見つめる。

この人今誰と会話してるんだろう。自分に言い聞かせてるみたいに見えるけど。

彼の考えた、アバターの運命を……。

気付くとイヴの身体をそっと抱き寄せていた。

ぽんぽん、と優しく右手で背中をたたく。

「大丈夫。例え飽きちゃったとしても、一緒に居た時間は消えないよ。親が居なくてもこうして色んな人と話せるわけだし、寂しくないよ」

「……」

「だから、さ そうやって無理に受け入れようとしなくていいんだよ。惨めだって格好悪くたって、悲しいものは悲しいんだから。我慢して笑わないの」

さっきまで凌の絆がどうこうとショックを受けていたはずの彼女は、今は自身より経験者であるイヴをリラックスさせていた。

どれくらい時間がたったか分からない。

ただ、彼を安心させる彼女の優しい手の動きはずっと止まなかった。

「……有り難う、ティアさん」

「いいのいいの。同じアバター同士分かるもん、その気持ち」

イヴの身体がそっと離れる。

「やっぱり女性って優しいよね。そういうところ好きだ」

「そういえば凌には『お前』とかってぶっきらぼうな口調だよね」

「うん、僕男そんな好きじゃないんだ」

「……そっか……」

自分だって男のくせによく分かんない人だなあ。

……私も、いつか凌に捨てられてしまう時がくるかもしれない。

でも、それはそれでいいのかもしれない。

イヴの言う通り彼にとって本当に大事にすべきなのは現実世界であり、こっちの世界を大事にしたせいで現実世界で墮落してはいけない。

……だったら、今を思い切り楽しまないと。

いつか別れがくるんだろう。

その時私は、笑顔で送り出してあげなくちゃ。

ティアはそっと空を仰ぎ、今冒険の支度をしているであろう彼の事を考えた。

「なんだこれ！！！」

エリアスから悲痛な叫び声。

「あら、良く似合ってるわよ？」

「そうじゃなくて、何で上半身何も着てない上に猫耳なんですか！ 訳が分かりません！」

ファッションを身に纏った凌は、あまりに予想外の服装に嘆いていた。

上半身には大きな傷跡だけで服は着ておらず、ヒップホップパンツのズボンに左耳には眼帯が。そして頭には髪と同じ色をした猫耳がぴょこんと生えていた。

「多分半裸なのはティアちゃんに斬りつけられた部分が『男の勲章』の傷のある場所と近いからね。それに……凌君は猫っぽいし良いんじゃない？」

「そういう問題じゃないですよ！ こんなティアに見られたら……」

凌がだるそうにため息をつく。

「見られたら？」

「『うひょおおお凌猫耳！ 猫耳だ！！ うっわああ可愛いいいいねえ触って良い!? 良い!? 良い!! ありがと!!!』って言ってこの耳触ったり揉んだり折ったりもう好き放題」

「わ、分かった分かった。でも、もう武器や防具は完成しちゃったみたいよ？」

「えっ」

アンネの視線をたどると、ケベルとバルトが楽しそうに見ていた。

「えらく可愛くなったなあ、凌。ほいよ、防具と武器できたぜ」

「可愛くないです。有り難う御座います」

武器と防具を手渡される。スラッシャー用の二刀だ、格好良い。

「あとティアちゃんとイヴも連れてきだぞ」

「凌一！ さてどんなファッションになったのかな……」

「ハッ」

まずい、逃げないt……

「うひょおおお凌猫耳！ 猫耳だ！！ うっわああ可愛いいいいねえ触って良い!? 良い!? 良い!! ありがと!!!」

さわさわさわもみもみもみもみぺたぺたぺたぺたむにむにむにむに

.....やっぱり。

「やめろ！うぜえ！」

「うー.....」

名残惜しそうにティアの手が離れる。本当に見た目通りの奴だよな.....。
あきれ顔でいるとイヴに名前を呼ばれた。

「凌、ちょっと良いか」

「？ おおう」

急にどうしたのだろうか。イヴは建物の外へと凌を連れ出した。
先を歩いていたイヴが立ち止まる。鋭い視線が凌を押さえつけた。

「単刀直入に言おう、凌」

「.....何だ」

「僕が黒幕.....他のアバターを操ってる、起点となったアバターなんだよ」

身体が、凍り付いた。

「……何が目的だ？」

「君のアバターに興味を持った」

「ティアのことか」

「そう。ティアさん。優しくていい人だ」

頭の奥でティアが微笑む。

……こいつ、ティアに何する気だ。

「賭けをしようじゃないか、凌。僕は、もう親とアバターの絆なんて信じちゃいないんだ」

「……」

「その指輪は三日で消えるって知ってたかい？」

「三日……！？ ……何故それを知ってるんだ」

三日間。

あまりに短過ぎる期間だ。今日はもう夕方だから一日目は終わりかかっている……つまり後二日しかない。

「それを作ったのは僕なんだ。ちなみに他のアバターを操るアイテムもね」

「お前、何がしたいんだ？」

「見せて欲しい。アバターは本当に親と打ち解ける事が出来るか」

「どうやって判断を？」

「凌が消えるとき。ティアさんが一言でも別れを惜しむ言葉を口にしたら、かな」

つまり行くなと言われればいいわけか。

それを聞いて少し気がぬける。

なんだ、案外簡単じゃないか。

「思ったより簡単って顔してるね。まあそう思うんなら僕が有利ってことか。まだ君はティアさんを少しも分かっちゃいない」

揶揄するようなその言葉に少しむっとする。

「……お前よりは長く共にしてるが？」

「何言ってるんだ、時間なんて関係ないよ。そんなのはただのお飾りにすぎない」

.....正当な言葉だ。

さらに、それに対して何もいえない。何よりそれが、一番悔しい。
だが、次に浴びせかけられる言葉は更に辛辣なものだった。

「.....何より君は今までティアという人物を理解しようとなんてしてこなかった。彼女の事を、
あって当たり前物だと思ってたんだ」

「当たり前だなんて思ってない！！」

叫んでいた。

そんな、あり得ない。俺がティアを理解してない。そんな訳が無いんだ。

怒りで体が煮えたぎるように暑くなる。頭が割れそうに痛い。

「本当にそう言い切れるか？ じゃあ聞こう。何故見つめようとしなかった？ 何故今お前は彼女を理解できていない？ ずっとあるものだと思ってたんだろう？覚えておけよ、凌」

イヴが目の前へ歩いて来る。

視線が突き刺さって動けない。

「『失うこと』っていうのは、自分の意志じゃ決められないんだよ」

視線を地面に落とす。

負けてしまった。視線を反らしてしまった。耐えきれない程の屈辱だった。

丁度そこに、おそらく何もしらないであろう暢気で明るい声はいる。

「凌ー！ ロハンさんがスキル教えてくれるって！あれ、何やってるの？」

「なんでもないよ、ティアさん。ほら凌、行ってきな」

立ちすくんでいた凌は、はっと我にかえると小さく頷き、ティアの方へと走っていった。

二日目はただ、ティアと2人で冒険していた。
黒幕を探すという名目で、絆を深めようとしたのだ。
彼女について色々分かった事があるから、纏めようと思う。

①料理がド下手

「凌！ 見て見ておにぎりつくったー」
「作ったっていうか握るだけだろそれ」

ティアの持つお皿に乗っているおにぎりを手にとり、まじまじと見つめる。
割ときれいな外見だし、美味しそうだ。

「じゃあ、頂きまーす……」

真っ白なご飯を口に含む。

……

に……苦い……だと……？

「……」
「お、美味しい……？ かな……」

少し頬を赤らめながら両手の一差し指をつんつんし合うティア。
ここでイヴだったら無理して「美味しいよティアさん」とか言うんだろうな。

「糞まずい」
「!？」
「おにぎりでここまで不味く作れるとかどんだけだよお前？ うっわ、苦かったのに急に甘くなった。うおっしょっぱくもなった！」
「うるさいなもおおおおおお！！ 凌の馬鹿！！ 禿げろ！！」

禿げねえよ！ と言おうとしたがもうそこにティアの姿は無く、お皿にのったおにぎりしか残っていなかった。

おにぎりをまた口に含む。

本当まずいな、これ。

あーまずい。

手にもったおにぎりを食べ終え、お皿からまたおにぎりを手にとる。

まずい、ほんとまずい。

おにぎりド下手選手権とかでれるんじゃないか、あいつ。

つか硬いなこれ……。

噛み砕いたお米をごくりと飲み干す。

もうお皿の上にも、手の中にもおにぎりは残っていなかった。

誰もいない場所で、凌は呟く。

「ごちそうさま。」

②でも歌は上手い。

彼女が歌うラテールのイメージソング、Girl meets boyは悔しいがかなり可愛くて、綺麗な声だ。

「アバターは、親の笑顔に会いたいんだよ」とかって歌詞にのっとなって笑っていたのを思い出す。

「歌うまいよな、本当」

「え」

ティアの瞳が驚いたようにこっちを見る。

「すげえ綺麗。綺麗だし、可愛い」

「どしたの凌、熱あるの？ ほっほら最近風邪とかはやってるし！」

「そもそもティア声可愛いしな。それプラス音感が加わるわけか。さすがミンストレルだ」

「ほら凌！ あんなところに小鳥がいるよ！！ 可愛いね！」

「うん、可愛い。」

「ね！ 可愛いよね小鳥！」

「ティアの声の話だけど？」

「……」

お、黙った。

あれ、耳が真っ赤に……

小さく放たれた弱々しい声が聞こえる。

「……ばか……っ」

兎が照れた。

③俺がいないと死ぬ

「あっちだよ！絶対あっち！！」

「馬鹿そっちは地図にも乗ってねえよ！ 敵わないくらい強いモンスターが居たらどうすんだ！」

俺らは二手に別れた別れ道のどちらに行くか言い合っていた。

「凌の地図の見方がおかしいんだって！ もおお私絶対あっちの道いくから！」

「勝手にしろ！ 俺は助けにいかねーかな」

「私だって凌がピンチでも何もしないもん！」

お互いに ふん！ とそっぽを向いて歩き出す。

少しすると、遠くの方に町が見えてきた。

何だ、やっぱりこっちの道であってるじゃないか。……するとあちは……

気付いた瞬間、轟音が聞こえた。

ドゥウウウンメリメリッ

そして聞き覚えのある声。

「りょおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「はいはい……」

悲痛なその叫びに思わずため息がでる。

本当、何なんだあいつは。

苦笑しながらも、声の聞こえる方へと凌は走り出した。

ずっとこんな風に上手くやっていける。
少なくとも俺はそう、思っていたのだ。

慣れてしまっていたのかもしれない。ティアという存在に。
だから、何かを言う時だって気をつかったりしなかった。
そのせいで彼女が傷つくだなんて、考えていなかったのだ。

それは三日目の朝。

俺はティアとイヴの三人で歩いていた。

「は一あ、これっぽっちの手がかりもつかめないな」
「仕方ないよ、みんなないんだもん」

ゆったりとした雰囲気野原にいるのは、三次転職を終えた状態の凌達には勝ち目のないモンスターだけ。

ぱっと見、いたって平和。なのにこの世界は今消えようとしている。
しかもそれを救えるのは俺らだけ、か。

ふいに暢気な生き物達に嫌悪感を覚える。
自分の住んでる世界が危ういの、隠れてる場合かよ。何やってんだよ、馬鹿か。
モンスターだってそうだ。何かできることぐらいあるだろうが。

「気晴らしに豆の木でも登るかい？」
「あ、いいねそれ〜」

それは二人にとっていつもの平凡な会話だったが、凌には耳を疑うものだった。

なんでどいつもこいつもこんな暢気でいられんだよ、ふざけんな。
そもそもイヴが居るせいでやりづらいたら仕方ない。普通敵っていったら一人で何かやってるもんだらうが。

二人の会話は凌の苛立ちをさらに募らせる。

次に凌が発する言葉は、本人にとってごく普通の愚痴だったけれど、それはティアにとって、信じられない一言だった。

「まったくアバター達も弱いよな。たかが主に、飽きて捨てられるくらいでさ」

口にしてから、すぐに後悔した。

ティアの足がびたりと止まる。

信じられないという顔をして俺を見つめ、そしてみるみる憤怒の表情へとかわっていく。

思い切り、怒鳴られていた。

「貴方に分かるわけない！！！！ 大好きな親と離れて、無力のまま消されていくアバター達の気持ちなんて！！！！」

ティアが走り出す。慌てて追いかけてやろうとしたところを、おい とイヴに肩を掴まれた。次の瞬間、イヴの拳が凌の鳩尾に思い切りめり込む。

「ッ……！」

「見損なったよ、凌」

冷たい言葉だ。苦しい。

当たり前だ、それくらいの事を俺は今……犯してしまった。

数時間たった今でも見つけられない。雨が、降り出した。

このまま、三日目が終わってしまったら。

俺はティアとこの関係のまま、一人現実世界に引き戻される事になる。

「信じてたのに」

急にその言葉が聞こえた。幻聴なのはわかっている。けれど、何かつつかかる声。
これは……俺がこの世界に来たときに聞こえた声だ。

聞き覚えがある声。イヴの声だ、間違いない。
でも何故イヴの声が？ 信じてたのにならぬ？

頭の中で何度も繰り返しているうちに、違う声にも聞こえるようになる。
この声は……

「ティア？」

信じてたのに。
信じてたのに。

雨が強くなる。

信じてたのに。

「そっか、信じてくれてたんだ」

「信じる」なんて強引で押し付けるような言葉、まったく使ってこなかった。
まるでねっとりと自分の身体に絡みついてきて、束縛されるような気がしたからだ。

だけど、今失ってようやく気付く。
そこにあるのは嫌気とか、重苦しさだけじゃなかった。
人に信じられるというありがたみ、そしてあったかさ。
そんなものが、確かにあった。

なのに手放してしまった。俺が、俺自身が、自分の手で振りほどいたのだ。

「お前、親に、……俺に、笑顔に会いたって言ってたよな。笑顔に、なってほしいって」

あの透き通る声がききたい。
あの、心に響くような歌が、ききたい。

あの、ぱあっと花が咲くような、そんな笑顔に、あいたい。

でも今彼女は、笑顔になんかなれるはずないだろう。
深く、深く傷つけてしまった。たった一言で。俺の一言で。

「馬鹿野郎、お前が不幸じゃ、笑顔になれるわけないだろうが！」

雨粒が、頬を叩き付けるように降ってくる。
朝からずっと走り続けていた身体が、これ以上無理だと悲鳴を上げる。
途中何十匹ものモンスターに襲われたけれど、それでも走って探していた。

足がもつれ、地面に身体が叩き付けられる。
四肢がじんじんと痛む。そして、重い。
まるで身体1つ1つが存在を主張しているかのように。

「……馬鹿だな……俺。本当、馬鹿だ」

惨めだ。
俺今、すごく、惨めだ。

もう、無理なのかな。
ティアとは、会えないのかな。

もう、あの歌はきけないのかな。

俺は彼女を笑顔にさえ、できないのか。

そんな事を考えて立ち上がろうと手をついたとき、何かが聞こえてきた。

これは……歌？

♪いつか出会う不思議の 鍵を開ける時はきっと
キミと一緒にいたら 大きな感動が生まれるね☆

ティアの歌声だ、間違いない。歌っているのは、Girl meets Boyだ。
でもいつもと何か違う。……少し、悲しい声。
満身創痍の体に鞭を打ち、走って行く。

大木が見えてくる。
そこには木の根元に腰掛け、俯いて歌うティアが居た。

よかった、やっと、みつけた。

気付くと微笑んでいた。

「……やっぱり、歌上手いよな」
「！」

驚いたような警戒するようなティアの顔。
俺が伝えたいのは、ただこの言葉だった。

「お前さ、俺にこの前笑顔になってほしいって言ってたよな」
「……うん」
「でも俺、お前が悲しんでるのに笑顔になんかなれない。 ごめんな、無神経なことって」
「凌……」
「許してくれるか？」

凌を見つめるティアの表情がくしゃっと歪む。
ティアは涙まじりの声で、小さく うん と頷いた。

凌は手をさしだそうと手をあげたが、何かその手に違和感を感じる。
俺の指が……なんか変だ。

手を開いてじっと見つめる。

指輪が、震えていた。

「な……なんだこれ」

かたかたと指輪が震えていた。戸惑っていると、凌！ と名前を呼ばれる。振り向くと、イヴが走ってきていた。雨はもうやんだみたいだ。イヴがぱっと凌の手をとり指輪を見つめる。

「……指輪が消えかけてる。もう時間がないぞ」
「そんな！ 私達なにも出来なかった……」
「それよりティアさん、凌君いっちゃうよ？ いいの？」

ティアが振り向き、凌と向かい合う。

「ごめん、ティア 俺が無神経な事言ったせいで時間が……」
「ばか、私も悪いの」
「……ありがとう」
「私ね」

ティアがそこまで言って黙り込む。
どうしたのだろうか。

「いつも、画面の向こうから凌の事気にしてたんだ。でも話す事も出来ないし凌あまりラテールやらないから、私って不幸なアバターだとか、思ってた」
「……」
「でも、貴方とこの世界にきて、いっぱい話せて、とても楽しかった」

一息おいて、続く。

「貴方に逢えたんだから、私世界一幸せなアバターだよ！」

ティアが幸せそうに笑う。大事な親を思う優しい瞳をしていた。

「俺も」

思わず口にでていた。
やべ、ちょっと恥ずかしいかも。

「お、俺も、幸せだよ。ティアと逢えて、楽しかった。有り難う」

少し驚いた後、へへ とティアがはにかむ。
でもこれじゃ、イヴとの賭けは成立しなかった。

「でも……随分あっさりして何からしくないな、ティア」
「え？」
「引き止めてもいいんだぜ？」

不思議そうにしていたティアの表情が硬くなる。
力強くて真剣な眼差しだった。少し声が低くなる。

「……馬鹿にしないで、凌。私だって無理なものは分かるし、我が儘言っても駄目なら言わない。
そこら辺の区別はつくのよ」
「……」
「……私が泣きわめいたって貴方はいっちゃうし、私はここに残される。それは不変の事実。
何いったって、無駄なのは分かってる」
「……そうだな」

うん、さすがティアだ。
賭けは成立しないけど、これで良い。しっかりしてる女性だ、ティアは。

「凌」
「ん？」

ティアがじっとこっちを見つめる。
何かを必死に堪えていたようだが、ぽつりと呟いた。

それは、震えて涙まじりの、弱々しい声。

「いかないで」

瞳を見つめる。大粒の涙が零れていた。
声にならない嗚咽の声。

「やだ いかないで凌 いっちゃだよ、そばにいて」

「ティア……」

何で俺、人間なんだろう。どうして、ティアはアバターなんだろう。
現実を呪いたかった。悲しかった。
彼女を、つれていきたかった。

「……負けたよ、凌」

イヴがため息まじりに呟く。
ポケットから何かの機械と短剣を取り出していた。

「ごめんティアさん、騙してた。俺が実は起点のアバター。そしてこれを壊せば全て解決する」
「……え？」
「いくよ」

機械に短剣を突き立てようとイヴが右手を高く掲げたその瞬間、予想外の事がおきた。
茂みから勢いよく現れたモンスター、プリリンが機械を吹き飛ばしたのだ。

「うわっ！」

イヴの手から機械が離れる。
慌てて追いかけてしようとしたとき、凌は自分の身体を見て凍り付いた。

「凌、足が……！」

足が、消えかかっている。
駄目だ、機械のところまで走って行ったんじゃない間に合わない。
どうする、考えろ、考えろ……！

その時凌はあるスキルを思い出した。
そう、特定のキャラクターにしか与えられない究極の攻撃スキルだ。

「ここで……」

そっと呟く。
初めての技だ、当たる確率は低い。が、やるしかない。
俺にしか、出来ない。

「PARANOIA！」

身体が高速回転する。刀と一体になるような感覚。
いける。

バキッ！

機械が壊れる音とともに身体の動きが止まる。
やった、当たった！

「わあああ凌すごい！　すごいよ凌、やったね！」
「すげえ……」

ティアとイヴの感嘆の声。
ほっとした顔で二人が駆け寄って来る。

「有り難う、感謝する！」
「おう」

そんな中、身体がどんどん消えていくのが分かる。
まあやる事はやった。悔いはないな。

「凌」

名前を呼ばれた。ティアは何もいわず、じっと凌を見つめていた。

「何？」

ティアは何かいいたいのだろうけど、言葉が見つからないようで少しあせっているようだ。
しばらく視線をさ迷わせた後にまたこちらを見て、はにかみながら言った。

「だいすきだよ」

楽しそうに笑うティア。

うん、やっぱりこいつには笑顔が似合うな。

「ん、俺も」

すぐに2人は消えて、見えなくなった。

あれからどれくらいたっただろうか。

そんなに月日も経ってはいない気がする。

3日だと思っていたのに現実では3週間経っていた。

そのため夏休みはすぐに終わり、俺は親にこっぴどく叱られ、PCも壊れて動かなくなっていた。

夢だったのかなとたまに思う。

だが胸に残る傷跡を見ると、やっぱり夢じゃないと思い苦笑する毎日だ。

さっきPCは壊れたといったが、今日は新しいのが届いた。

3ヶ月ぶりだろうか、ラテールを開くのは。

ティアはちゃんとスロットにいるだろうかなんて考えながらロードが終わるのを待つ。

girl meets boyの歌詞をなんとなく検索してみた。

うん、やっぱり良い歌詞だ。

カチャッ

ロードが終わりログイン画面が現れ、可愛らしいイントロが部屋に響く。

♪At any time 出逢い求めて 触れ合いたい 感じたい

しばらくその音楽に耳を傾ける。

懐かしいな。これを前回聞いたときは、まだティアと会う前だ。

このPCを通して、あの世界にいったんだよな。

「ん？ このPC？」

あの時は確かこのPCを使ってラテールへとワープした。

もし、まだあの世界と通じてるとしたら……

そして困惑している凌の背後から、聞き覚えのある声が。

「ひさしぶり、凌」

振り返るとそこには、今も忘れない兎耳の彼女。

思わず笑顔が零れる。彼女も、嬉しさこの上なさそうに笑った。

♪信じる仲間が集まったら 行こうよ！Unknown worldへ☆

そうだな、ティア。確かに君は俺の笑顔に会いたいし、俺だって君の笑顔に会いたい。
だけどそれだけじゃ駄目なんだよな。

ありがとう、今やっと気付けた。

どうすればお互いの願いを叶えられるか、ね。

♪キミと、笑顔になりたい

—Fin—

ここでPARANOIA！

<http://p.booklog.jp/book/25462>

著者：玲奈

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/renaemon39/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25462>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25462>

ラテールライトノベルコンテストにて、本作品が一次審査通過致しました！
これもご愛読して下さった皆様と、お手伝いして下さった方々のおかげです。
私からも言いたいことは沢山あるのですが、キャラクター達が何か言いたそうなのでブログで我慢します。

コンテスト終わったから文字数気にしなくて良いよ！やったね！
↑こんな感じでちょっとゆるめなので、苦手な方はお戻りください！申し訳御座いません。

-----切り-----

「スタートキー、シャットダウン、と……」

日が暮れ、もうそろそろ夕飯時。
今日は両親が居ないので夕飯を担当することになった凌は、いつもより早めにPCを閉じた。

あー、今回決闘勝てなかったなあ……みんなやっぱ強い。

ふう、と息をついて椅子の背もたれに体重を預ける。
夕飯、どうしようか。作るようにいわれて取り敢えずOKしたけど、何作るか決めてなかった……。

目を閉じて思考を巡らしていると、それを邪魔するかのようになががががと玄関をこじ開けようとする音が聞こえた。

……帰ってきたか。

気だるい体を動かして玄関へと向かう。
電気のついていない暗い玄関だが、目をこらしてよく見るとレバーが激しく上下しているのが見えた。

ホラーかよ……。

「おい、鍵はお前が出てく前に渡しただろうが。まだ開け方覚えてないのかよ、ティア」

明かりをつけ、呆れた声で必死にドアをこじ開けようとしている彼女に声をかける。

すぐに困ったような拗ねたような声がかえってきた。

「だ、だってラテールに鍵なんてなかったんだよ！ 現実世界は物騒だから悪いんだっ」

「だとしても差し込んで回すだけだろうが。ったく……」

内側から鍵をあけてやると、力強くドアが開けられた。フッ、とドアの端が頬に掠る。

「つぶねえ……」

「凌一！！ 見てみて！ ラテールライトノベルコンテストの結果発表がでたよ！！」

「帰れ」

「何怒ってんの！？」

♪

「……っていうこと。すごいよね、ここPARA一次審査通過したんだって！」

「おお、すごいな。沢山の人たちに支えられて完成した作品だもんな、素直に嬉しい。……って、ここPARAってまさか」

「そのまさか！ 『ここでPARANOIA！』の略だよ～」

「なんか『ここでパラパラ！』の略みたいだな」

「その発想はなかった」

冷蔵庫へ歩いて行ってコーラとミルクを取り出す。

グラスに注いでいると、ソファの上でごろごろしているティアがまた声をあげた。

「それでね、私達に作者が挨拶させてくれるんだって」

突拍子のないその重大発表に思わずドリンクをこぼしそうになる。

挨拶……！？

「！？ ちょっとまで、いつの話だそれ」

「今」

「今！？ じゃっじゃあさっきの俺の阿呆な発言も公に……」

「されてるね。ここでパラp「黙れ」」

……待て、とりあえず落ち着け。過ぎたことを悔やんでも仕方ない。

暢気にソファで寝転がりながらミルクを啜るこの鳥頭、もとい兎頭は頼れない。俺がなんとかしないと……

深く息を吸い込む。

「挨拶が遅れて申し訳ございません。この度は『ここでPARANOIA！をご愛読有難う御座いました』」

「凌、緊張しすぎ。タイトル、長くなってるから」

「うるせえ、お前は緊張しなすぎなんだよ！ ならお前もなんか言え！」

「えっ」

ホッ、と軽く咳払いをするティア。

「どうもお久しぶりです、ティアです！ なんと『ここでPARANOIA！』は一次審査を通過することができました！ これも応援してくださった皆様方のおかげです。どうもありがとう！ もしかしたら番外編とかかくかも、って作者が調子のって言ってます！」

「おいティア」

「ん？」

「寝転がりながら言っても説得力ないぞ。見えなきゃいいってもんじゃねえ」

「言うてはいけないことを……」

フッ、と軽く鼻で笑う。

すると頭の中で何かをひらめいた。というか、思い出した。

「あ、そうだ。ブクログのパブー様からメールきてたんだぜ」

「えっなにになに！？ なんて書いてあったの！？」

大切なものフォルダからメールを見る。

うん、いつ読んでも嬉しい文章だ。

「なんでも、ここPARAは最後まで大賞作品様と争ったんだそうだ。『作品として完成度が高い』、『キャラクターがかわいい』って賞賛して頂いたらしい」

「ほんとに！？ いやぁ～かわいいだなんて照れるね！」

「そうだな、ティアかわいいもんな」

「……」

「ん？」

「絶対からかってるでしょ……っ」

「うん」

「もう！！ ばか！！」

笑いながらコーラを飲む。炭酸が口の中いっぱいになり、喉を刺激した。

「そういえば凌、夕飯どうするの？」

ギクリ。

これは……死亡フラグか。

「え、な、ないけど」

「じゃあ私つくるよ！！」

やっぱり。

「やめろ。お前は台所に何の恨みがあるんだ」

「そっちこそ私に何の恨みがあるのさ！？」

「俺の命のためだ、我慢しろ」

ティアの耳がぴょんと伸びる。必死にむきになった声を張り上げていた。

「でっでも私こっちきてちょっと上手くなったんだよ！？ ほら前にもクッキー焼いたじゃん！
ね！！いいでしょ？」

「クッキーっていうのはあの隕石のことか？」

「もおおおおうるさいなあああつくるったらつくるの！！！！！！」

「あああああうるせえな、わかったわかった。いいぜ、作れ。勝手にしろ。」

「！ 本当！？ やった！！ 凌さっすが！ イケメン！！ カッコいい！！ 猫耳！！」

「そこにカップラーメンがあるからお湯沸かして注いでくれ」

「怒らないでよ！！」

♪

カッと手を振り、映像を映し出していた煙を散らす。

「はあ、映像とれって作者に言われたは良いけど……相変わらずの二人だよまったく。僕だったらティアさんにもうちょっと優しくできるのにさ」

軽くため息をついて、芝生にねっころがる。
ペットのプリリンがそっと寄り添ってきた。

「はは、くすぐったいよプリリン。……そういえばお前と会ったのは凌君たちもいたんだよな。まったく、お前が僕の機械を体当たりで吹き飛ばしたときは本当にあせったんだからな。聞いているか？」

キュウ、とプリリンの鳴き声がきこえる。

「聞いてたか。ならよろしい」

愛らしい声に微笑みながら青空を仰ぐ。

今日も、良い天気だ。

すると、イヴの耳に懐かしいメロディが響いた。
これは……Girl meets Boy。

「え？ ま、まさか……。マスターがかえってきたっていうのか？」

ラテールで親がログインすると、ゲーム内のキャラクター達はこの曲を合図にスロットへと並びに行く。

そこで選択されればそのままプレイヤーと狩り、選択されなければ元の位置でまた自由な時間を過ごすのだ。

本来は「親」と呼ばれるプレイヤーだが、イヴは個人的に「マスター」と呼んでいた。

「親」と呼ぶことを知ったのは、実はつい最近なのだ。

「で、でもそんなわけないよ。マスターはもう随分ラテールに来なかったし……」

どうしようか迷っていると、プリリンがまたキュウ、と鳴く。

「……迷ってる暇はない、か。ここで待っててくれるか、プリリン」

こくりとプリリンがうなずいたのを合図に、意を決してイヴはスロットへと移動した。
ドク、ドク、と体内に響く心臓の音を感じる。

もしかしたら、　もしかしたら……。

目の前が明るく光る。

そこには、懐かしくて、だいすきな、あの人の顔。

「イヴ！　よかった、まだいた。久しぶりにラテールやろうと思ったんだよね。またよろしく」

こちらこそ！と叫びたいのを堪える。

そんなことをしたら大変だ。何がおきるか、わからない。

それでもイヴの体中に喜びという名のI初キ-が駆け巡る。

ありがとう、もどってきてくれて、ありがとう。

思い出してくれたんだ。

また、一緒にいられるんだ。

選択された後のロード時間、

イヴは溢れ出る涙を堪えながら、幸せそうに微笑んだ。

「おかえり、マスター」

ベロスの和やかなBGMが聴こえてくる。

あたたかな太陽の光が、イヴを優しく包み込んだ。

Special Thanks

編集・ダメだし等

- ・kuronuko
- ・相方

イラスト

- ・さゆ

AND YOU!!